

ISSN 0910-2396

# 野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第166号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成23年12月21日

アオアシシギ



2011.9.23 いしかり調整池 (石狩市北生振)

撮影者 川東保憲 (札幌市清田区)



も く じ

営巣中のオオタカに配慮すること  
北海道ぶり縄研究会・北海道野生動物研究グループ

	札幌市	松岡 和樹	
	北海道ぶり縄研究会	江別市 嘉藤 慎譲	
	北海道ぶり縄研究会	恵庭市 米田 裕之	2
人と野生動物の関わりから考える一つの地球、一つの健康 旭川市旭山動物園、人と野生生物の関わりを考える会			
		福井 大祐	4
口無沼の野鳥	苫小牧市	鷲田 善幸	8
仙台での鳥見	仙台市	田中 哲郎	10
美唄市和田公園の鳥その後	美唄市	藤巻 裕蔵	11
観察環境について感じたこと	江別市大麻	蓮井 肇	12
蒲澤鉄太郎さんを悼む			
	北海道野鳥愛護会会長	小堀 煌治	13
探鳥会ほうこく			14
探鳥会あんない			16
鳥民だより			16

## 営巣中のオオタカに配慮すること

北海道ぶり縄研究会 札幌市 松岡 和樹  
北海道野生動物研究グループ  
北海道ぶり縄研究会 江別市 嘉藤 慎譲  
北海道ぶり縄研究会 恵庭市 米田 裕之

◆はじめに

北海道ぶり縄研究会では、2007年の設立時から、樹上での調査研究と自然観察、野遊び体験による環境教育活動を積極的に進めてきました。代表および会員の多くは、自然環境調査に携わる仕事をしていることから、仕事で得た知識や経験を、社会貢献活動のひとつとして身近な人に伝えていきたいと考えています。

活動目的は、主に樹上での自然観察および生物調査のほか、木登りを通じた野遊び体験に関する活動を行うことにより、会員と参加者が身近な自然と野生生物保護の重要性についての関心を高めると共に、自然観察時の安全管理意



識の向上を目指しています。

2011年は、(財)北海道新聞野生生物基金の助成を受け、「札幌市およびその周辺における樹冠の生物多様性調査」を実施し、樹冠の生物多様性や樹冠の魅力について広く情報発信をしています。

◆オオタカは身近な鳥類？

我々が進めている「樹冠の生物多様性」の研究対象には、樹冠部に巣を架けて営巣するオオタカも含まれています。オオタカは、森林・里山生態系の上位に位置付けられ、自然豊かな樹林環境の指標種としても注目度が高く、日本各地における保護・保全活動の対象になっている鳥類です。このようなオオタカの保護・保全活動には、一つ一つの研究成果が『重要性』や『保護の意義』、『保全手法』等の裏付けとして役立てられています。

オオタカの研究が進むに連れて意外なこともわかってきました。それは、今まで考えられていた以上に『我々人間の身近な場所に生息している』ということです。最近では防風林が狭まったり、山地に住宅地が迫ったりで、人目に付きやすい場所での営巣がよく見つかっています。また、野鳥に興味を持つ人が増えた結果として、オオタカに気付く人も増えてきました。中には、営巣中のオオタカの巣の真ん前でドカッと腰をおろし、大きなレンズを巣に向け、平気な顔で写真を撮影する心ない人もいます。

## ◆人間の視線は営巣中のオオタカにストレスを与える

営巣中のオオタカは非常に神経質になっているので、“見る”という行為は、少なからずストレスを与えてしまうことを認識しなければなりません。また、そのストレスの程度は、繁殖段階によって異なることも知っておくべきだと思います。時期によっては、林縁にとまっているオオタカを観察するだけで繁殖を阻害することに繋がってしまいます。

## ◆オオタカの繁殖段階とは？

北海道のオオタカは、3月中旬から4月頃に渡来し、すぐに繁殖活動を開始します。繁殖活動は、交尾や巣造りを行う『求愛造巢期』、産卵して卵を温め続ける『抱卵期』、雛を巣の中で育てる『巣内育雛期』、巣立った幼鳥を営巣木のそばで育てる『巣外育雛期』の4つの段階に分けることができます。

## ◆求愛造巢期；3月中旬～4月中旬頃

『求愛造巢期』は、ペアリングや交尾を行う大切な時期です。また、巣の位置を決める重要な時期でもあります。人間によるプレッシャーは、この巣の位置の決定に大きな影響を与えることとなります。8年程前のことですが、オオタカに余計なプレッシャーを与えてしまい、巣の位置を移動させてしまった経験があります。そのオオタカは、途中まで造巢していたにも関わらず、100mほど離れた古巣に繁殖の場を移してしまいました。運よくこのオオタカの繁殖は成功し、翌年以降も継続して営巣してくれましたが、我々の行動は安易且つ最悪だったと、ただただ反省するばかりです。

## ◆抱卵期；4月中旬～5月下旬頃

『抱卵期』は、主に雌親が抱卵を行います。抱卵中の雌親は、人間のプレッシャーを受けてもしばらく巣に伏せてジッと様子を伺っていますが、一線を越えると巣から飛び立ち、激しく「ケケケケ・・・」や「ピャー、ピャー」等の鳴き声を発しながら飛び回ります。大半の場合、危険が去れば巣に戻って抱卵を再開しますが、時には抱卵を放棄することがあるようです。また、気温の低い時や降雨時に抱卵を再開できないと、卵が死卵となってしまう可能性があります。さらに、雌親不在の巣にカラス等の外敵が飛来し、卵を奪っていく可能性も否定できません。直接的な影響に目がいきがちですが、このような間接的な影響のことも十分に考えなければいけません。

## ◆巣内育雛期；5月下旬～7月上旬頃

『巣内育雛期』は、前半と後半で状況が異なります。前半は、自分で体温維持のできない雛を雌親が抱いて温めます（＝抱雛）。暖かい日は、雌親が巣のそばの枝にとまっ

て雛を監視します。この時期は、少しでも巣に近づくと雌親が激しく鳴きながら威嚇してきます。先にも述べたように雛は体温維持ができないため、雌親を巣から飛ばすだけで雛が死んでしまう可能性が高まります。一方、後半は、雌親も巣から離れて狩りに出かけることが多くなります。このため、巣に人間が近づいても、これまでのように怒り狂った親鳥と遭遇する機会は減少します。ただし、各段階で共通することですが、人間に警戒して親鳥が入林にとまどうと、雛への給餌が滞ります。観察者は、目に見えた警戒行動が確認できなくても、知らず知らずに影響を与えてしまう可能性があることを忘れてはいけません。

## ◆巣外育雛期；7月上旬～8月下旬頃

『巣外育雛期』は、巣立ち後の雛、すなわち幼鳥が巣のそばに滞在し、親鳥からの給餌を受けて成長していく段階です。巣立ち直後の幼鳥の飛翔能力はとても低く、人間のプレッシャーによって落下するように地面に降りてしまうことがあります。実際に林内にいた幼鳥を驚かせて飛ばしてしまい、林外へ出た直後に小麦畑へ落下させてしまったことがありました。幸い、落下した幼鳥は自力で営巣林まで戻ったようで、その後も林内で活動している様子が確認できました。樹上生活者が地面に落下するということは、天敵であるキタキツネ等に捕食される危険性が高まるということです。幼鳥が巣立っていたとしても、決して楽観視することはできないのです。



## ◆おわりに

徐々にはありますが、確実に人間の生活環境に近付いている野生動物たち。オオタカもそんな動物の一種だと思います。

もしも偶然、営巣中のオオタカを見付けてしまったら、双眼鏡を構える前に今回の内容をちょっと思い出してみてください。今までは見えなかった背景が見えてくるかもしれません。

北海道ぶり縄研究会

<http://buriken.jimdo.com/>

北海道野生動物研究グループ

<http://hokkaido-wildanimal.blogspot.com/>

# 人と野生動物の関わりから考える一つの地球、一つの健康

旭川市旭山動物園、人と野生動物の関わりを考える会 福井大祐

## 【人と野生動物の関わりの変化】

この秋、全道各地で、ヒグマやエゾシカの都市部への出没が目立ちました。それぞれ、ドングリの不作が要因、天敵オオカミの絶滅が要因で増えすぎているためなどと言われることがありますが、それほど単純ではありません。加えて、ヒグマによる人身事故やエゾシカによる農林業被害など多様な野生動物問題を考える上で、自然環境要因に加え、社会的要因にも目を向ける必要があります。

人の生活圏や生活様式の変化に伴い、人と野生動物の関わり方も変化してきました。中山間地域での少子高齢化・過疎化や耕作放棄地・手入れ不足人工林の増加により奥山の荒廃が起り、人と野生動物の間に存在していた境界が曖昧になりました。さらに、狩猟者が減ったり、駆除が行われなくなったり（1990年以降、春グマ駆除を中止）、野生動物にとってすみやすい生息環境ができました。北海道では、牧草地の増加と針葉樹の植林が、エゾシカにとって好適な「餌場」と「越冬場所」を提供しました。

また、人の生活に適応した都市型野生動物が繁栄し、ゴミの不始末や野生動物への安易な餌付けは人の居住区域に野生動物を誘引し、さらなる軋轢を助長します。

今、これら個体レベルを超えた野生動物問題に対処するため、「人」の要因にも目を向ける必要があります。多様な野生動物問題が発生していますが、その多くの発生要因には人が関わっており、同時に解決の糸口も人が握っています。人も野生動物も快適な環境を創っていくためには、人・家畜・野生動物、そして生態系の健康を目指した対策が必要です。

本稿では、地域における人も野生動物も快適にくらせる環境づくり、そして身近な自然と生き物を大切に想う心を育てるため行っている動物園と市民団体の普及活動を紹介しながら、野生動物との共存と対策について考えるきっかけにしたいと思います。

## 【野生動物への餌付けは自然にやさしい？】

森林を伐採して野生動物の生息地を破壊したり、工場廃水を垂れ流して河川を汚したり、私たち人間は地球に迷惑をかけることがあります。実は、心やさしく、自然にやさしく見える野生動物への餌付け（餌やり）も地球を病ませる可能性があります。

野生動物は、自然生態系の中を自分の力で生き抜いており、人が世話をしないと生きていけないペット・家畜とは異なります。本来、人が野生動物に餌を与える必要はあり

ませんが、さまざまな目的のため、野生動物への餌付けが行われます。例えば、絶滅回避のための道東のタンチョウ・シマフクロウ、農作物被害防止と保護を目的とした出水のツルへの給餌があります。野鳥を間近で観察でき、自然に親しむきっかけとなる、餌台（バードテーブル）も餌付けの一例です。

しかし、2010年冬には、出水のツル越冬地でナベツルの高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）、2008-2009年冬には、旭川で餌台が感染拡大の要因となったスズメのサルモネラ感染症の集団発生が確認されています。さらに、餌付けによって集合した野鳥がHPAIやサルモネラ感染症を家禽や家畜に感染を拡散させるおそれが指摘されています。

また、観光や写真撮影目的でキツネ、リスやフクロウへ、個人の愛護目的でキツネやタヌキへの餌付けもあります。この観光や個人の愛護目的での餌付けは、野生動物の人慣れやその結果としての人への攻撃などの生活被害や農作物被害を引き起こし、人と野生動物の関係を悪化させます。さらに、その結末として、駆除や交通事故あるいは感染症など餌付けをされた個体自体の運命も不幸な方向へ導く可能性もあります。さらに、餌やりをした人が捨てたゴミ、動物が食べ残した餌や多量に排泄した糞は、環境汚染につながってしまいます。

このように、野生動物への餌付けは、『環境問題』や『社会問題』の一つとして捉えることができます。

## 【カモ・ハクチョウの餌やりに行きますか？】

旭川の人工河川、永山新川では、親水事業として従来、カモ・ハクチョウへの餌付けが推奨されてきました。冬のカモ・ハクチョウ渡りシーズンには、その飛来報道を号砲に市民が一斉に餌やりをしに川に向かうという自然との接し方がありました。

しかし一方で、餌付けは、オナガガモやオオハクチョウといった特定の種類の野鳥を一カ所へ集合させ、渡りのルートや越冬場所での滞在期間が変化するなど彼らの行動生態へ影響を及ぼします。1月に入っても南下せず越冬する個体やけがをして飛べなくても生存する個体が現れ、餌付けが現実には生態系を変質させています。ウトナイ湖では、翼を骨折して飛べなくなった個体が餌付けにより生存し、繁殖期にロシア極東部へ渡っていくはずの健全個体と繁殖しています。また、個体を密集させることで、捕食者の大型猛禽類やキツネ・ミンクなどを誘引したり、感染症の集団発生を起りやすくさせたりします。

### 【給餌という善意の功罪】

2010年10月に稚内市大沼でカモの糞便からHPAIウイルス(H5N1亜型強毒株)が検出されて以降、12月から2011年5月までに、日本各地で野鳥からHPAIウイルスが確認され、大きな社会問題となりました。鳥取のコハクチョウ、北海道浜中町・厚岸町のオオハクチョウ、各地のキンクロハジロやハヤブサなど15種60個体で分離されました。

2010年12月22～27日に国際的なツルの越冬地である鹿児島県出水市において、ナベヅル5羽でHPAI感染死が発生しました。私は、2011年1月2～6日、環境省より日本野生動物医学会を通じて現地に派遣され、死亡野鳥の簡易キットによるHPAI検査に従事してきました(図1)。任務終了後、健康観察期間を設け、11日に職場復帰しました。野鳥からの採材と衛生・公衆衛生に習熟し、ウイルス飛散を防止できる技術を有する人材は限られており、この対応では、当学会、動物園獣医師として、野鳥の感染症モニタリングを通して一つの社会貢献のあり方を示すことができました。



図1 出水のツル越冬地での高病原性鳥インフルエンザ対応

出水平野のナベヅル・マナヅルや釧路湿原のタンチョウのように、希少種の保護増殖を目的に「給餌」が行われてきましたが、以前より、密集地での感染症による大量死の発生が懸念され、個体の分散が課題に挙げられていました。出水のツルでHPAI感染が広がった事例を契機に、給餌のあり方や個体分散の議論が活発化しました。希少種の保護目的での給餌とは言え、当然ながら、野生動物への餌付けとしての共通の問題を含んでいます。

### 【身近な野鳥“スズメとカラス”のSOS】

#### 1. スズメの大量死

2005～2006年冬、旭川と札幌を中心に北海道内でスズメの大量死が発生しました。同じ頃、旭山動物園にも市民から「スズメが弱っている」、「死んでいる」などと通報が寄せられていました。これは、スズメからのSOSでした。しかし、当園では2005年度から傷病野生動物の救護活動を中止していたため、対応を拒否しました。複数の研究機関が調査に関わりましたが、初動調査が遅れて死因究明は難航し、「消えたスズメ、謎の大量死」として連日マスコ

ミ報道され、社会は大騒ぎしました。“事件”が沈静化してから、一要因として融雪剤やサルモネラ感染症などが報告されましたが、北海道庁は、大量死をすべて一括説明できないと総括しました。

その後、「スズメの大量死」は、風化しつつありましたが、2008～2009年冬、旭川を中心に再び“事件”は起こりました。旭川市内でスズメの集団死が発生し、約200羽の死亡報告がありました。2009年1月、旭山動物園内でも1羽のスズメが保護直後に死亡しました。北海道上川支庁(当時)と対応を協議し、地域の環境モニタリングと飼育動物の衛生管理対策のため、死因調査を実施しました(図2)。私は、3年前のスズメのSOSに報いることができずに残念で悔しい思いをしていたため、上司に直談判して調査が可能になりました。



図2 スズメの集団死調査

異なる13カ所から26羽の死体を回収して調べた結果、すべてから *Salmonella Typhimurium* (ST; ファージ型DT40) が検出され、死因はサルモネラ感染症と診断しました。融雪剤成分は検出されませんでした。餌台の上や地面に落ちているスズメの糞からもSTが検出され、餌付けが感染拡大の温床になっていることが判明しました。つまり、この旭川で発生したスズメの集団死は、「人災」であったことがわかりました。分離した菌株は、鶏卵やカメで問題となるものとは異なり、国内で2005年以前には確認されていないので、海外から侵入してきた外来病原体と考えられています。

2009～2010年冬にも、旭川と苫小牧でスズメのST感染症による小規模集団死が発生し、苫小牧では、カワラヒワ1羽をST感染症と診断しました。カワラヒワの死体からは、スズメの集団死が発生した民家の餌台で与えられていたも

のと同じ餌が検出され、スズメからカワラヒワに感染が広がった可能性が推測されました。

スズメも餌がなければ移動します。人為的に餌台に集めて感染症を蔓延させることは避けなければなりません。餌台をしっかりと管理できないのであれば、野鳥や自然に迷惑がかかるので出すべきではありません。ましてや、無差別な餌まきは慎むべきです。餌台を置く場合、上も地面も毎日きれいに掃除を行い、アルコール消毒することが最低限守るべきマナーです。ちょっとした自然への思いやりがあれば、スズメは犠牲にならないでしょう。

私は、この調査結果をスズメのST感染死体とともに園内に展示して紹介し、入園者にスズメと人の関わりについて考えてもらう場としました。科学的に解明した結果を市民にわかりやすく伝えて普及し、対策につなげることが重要です。言わば、スズメの調査研究、原因除去、普及は、それぞれ地球の検査・診断、治療、予防です。これぞ保全医学の実践の一例と言えるでしょう。

## 2. カラスの鳥ポックスウイルス感染症

カラスもSOSを発しています。

札幌市内を中心にその周辺、さらには十勝や旭川のカラスに鳥ポックスウイルス感染症 (AviPox) が広がっています (図3)。AviPoxに罹患した個体は、眼瞼、嘴や趾の皮膚に腫瘤が形成され、その病変が大きくなると眼が塞がったり、木に止まれなくなったりします。出血したり、細菌の二次感染が起こったりして衰弱すると死に至ることもあります。



図3 カラスの鳥ポックスウイルス感染症

札幌カラス研究会の中村眞樹子代表によると、2005年頃から札幌市内で病変を持つ個体が確認され始めました。検査の依頼を受けた私は、2006年に回収されたハシボン

ガラスの死体を調べ、AviPoxを初確認しました。以降、2007年には、ボソ2例 (札幌)、プト4例 (札幌3例、野幌1例)、2008年にはプト2例 (札幌、旭川)、ボソ2例 (札幌、十勝)、2009年にはボソ2例 (札幌、十勝)、プト1例 (札幌)、2010年には5例 (旭川) で診断しました。また、釧路でも2009年にボソ2例で発生が確認されています。

ゴミステーションやゴミ処分場といった、いわば非意図的な餌付け環境が感染拡大の温床となっている可能性が高く、ゴミの取り扱い方法の改善など人間生活の見直しによって人為的発生を予防することができるでしょう。

### 【動物園のカラス先生】

旭山動物園では、カバの横に、有害駆除のため捕獲されたハシボンガラスとハシプトガラスを旭川市から譲り受け、展示しています。

カバよりもカラスの前に多くの人が集まっていることもあり、「なぜ、動物園にカラスがいるの?」「わあー、カラスだ!! すごい!」、「旭山動物園に来て何が一番すごかったって、人の多さとカラスだね」といった会話も聞かれました (笑)。みんな、こどもの頃から身近でカラスをずっと見てきたのに、間近では見たことがなかったのです。

その行動生態、器用さ、賢さ、そして人との軋轢などについて看板パネルで解説を加えました。また、カラスの脳容積の大きさを実感してもらうための頭骨の標本、色や肌触りを感じてもらうための翼の標本、およびハンガーなどを使って作られた巣も展示しています。

カラスに街のごみが荒らされると、彼らを「悪者」にしてしまう人間ですが、そもそも、原因は私たち人間にあります。ごみを荒らされたくなければ、ごみ出しのルールを守るしかありません。それどころか、カラスは、生き物の死体や昆虫などを食べ、街を掃除して美しく保っている役割があると園内ガイドで話をしています。また、カラスを間近で見てもらうと、真っ黒ではない、美しい濡れ羽色の輝きに気づいてもらえます。ガイドを聴いて下さった参加者の皆様は、一様にカラスの意外な?! 一面を知り、感心して帰って行かれます。

展示個体は、処分される運命だった個体ですが、動物園で一生過ごす運命を与えられました。どちらが幸せか、もちろんわかりませんが、このような試みが少なくとも野生にいるカラスの仲間やカラスで困っている人間にとっては、幸せな方向に向くはずだと信じております。私は、展示個体を「カラス先生」と呼び、人と野生動物の関わりについて考えるきっかけとなることを願っております。

### 【人と野生動物の関わりを考える会】

2008年6月22日、旭川市内の永山新川におけるカモ・ハクチョウ類への餌付け問題を一つの素材として、人と野

生生物の関わりについて考えるための市民活動グループをつくりました。地域住民、日本野鳥の会旭川支部、自然保護団体、研究者、専門家（動物園）、行政（旭川市、北海道上川総合振興局、旭川河川事務所）などさまざまな立場の人が共に知恵を出し合って考え、自然を心から愛する意識の普及と活動を目指しています。キーワードは、人と野生生物のお互いが快適にさせる“距離感”です。野生生物との共存を模索していく上で、野生生物が意志を持って関係を築くことはできないため、人が「野生生物とどのような関係をつくっていくべきか」という課題に置き換えて考えることとなります。

全国でカモ・ハクチョウ類への餌付けが行われていますが、近年、HPAIの発生と人為的拡散および人の健康・生活への被害防止の観点から、餌付けを規制する地域も現れてきています。しかし、ハクチョウへの風評や誤った自然認識につながる結果も産み出し、生態学的あるいは栄養学的問題への焦点がボケ、共存や保全という到達点からは遠ざかっている気がします。軋轢のない平和な「人と野生生物の関わり」づくりが必要です。

考える会では、これまでに地域の野生生物との共存や自然環境の保全を目指したルールをつくっていくための勉強会や講演会の開催、ハクチョウへの餌付けが及ぼす影響や野鳥の生態を学べる野鳥観察フェンス「生き物思いやり線」の設置（図4）、チラシ配布による普及活動、自然観察会、外来生物の捕獲観察会（ヒキガエル・アライグマ）、小学校への出張授業、幼稚園・保育所でのパネルシアターなどを行ってきました。また、スズメの大量死の調査研究などを通して地域の自然環境のモニタリングも行っています。



図4 野鳥との距離感を学ぶ「生き物思いやり線」

当地では、考える会の草の根運動が芽を出し、HPAIが多発するよりも前の2009年には、ハクチョウに餌付けをする人はほとんど見られなくなりました。動物園でもずっと伝えてきたことでしたが、すぐには変えられなかったこ

とでした。地域のルールを変えるためには、「伝える」ことに加え、地域の人とともに「行動する」ことが大切であることを学びました。そして、正しく知って意味を理解した上で、納得して行動することが長続きするルールになると考えます。

#### 【一つの地球、一つの健康】

私たちが毎日食べている魚や野菜などの自然食材は、自然からの恵みです。これは、地球上の様々な生き物がバランスを保ちながら共に生きている（生物多様性）おかげ。私たち人間を含む様々な生き物が生態系で役割を果たすことで、私たちは、自然から様々な恩恵（生態系サービス）を受け続けることができます。

動物が生きていくために、植物、森は欠かせません。森のはっぱが地面に落ち、土に栄養を与えます。その栄養は、雨水とともに川から海へ流れ、植物性プランクトンやコンブなどの海草を育てます。そして、動物性プランクトンを育て、小魚や貝などの生き物を育てます。さらに、サケやマグロなどの大きな魚を育てます。つまり、豊かな森が魚や貝などの生き物を育て、豊かな資源を産み出します。私たちは、森から、酸素や水の他にも、これらの自然からの恵みをいただいているわけです。

自然環境は絶妙なバランスで健康に保たれています。ミミズ、オケラ、アメンボだって、カラス、ヘビ、毛虫だって、地球の健康に必要です。私たちは、特定の動物、特にハクチョウ、スズメやキツネなどの“かわいい”動物に餌を与え、やさしくした“つもり”になります。でも、そのえこひいきは、生態系のバランスを崩し、行動生態を変えてしまい、人とのトラブルや感染症を発生させるなど多くの問題を引き起こします。

野生動物は、人に餌をもらわなくても、厳しい自然の中、自分で餌をとってたくましく生きています。野生動物もヒトも平和にくらすためには、私たちが野生動物と適度な“距離感”を保つことが必要です。大好きでもっと近づきたいのだけれども、そっとかげから温かく見守る…、のが本当の愛情ではないでしょうか？ 一番大切なのは、野生動物や自然への“関心・興味”だと思います。そして、自然について広く“知る”ことです。

いろんな意味で、一番大事なものは、「人」です。私たちの身近な自然環境は、水（海）、空気（空）で地球全体とつながっています。そして、もう一つ、人間同士でもつながっています。私たちが身近な自然環境を大切にしていけば、北海道から日本へ、日本から北極、南極、世界へその想いは伝わっていくはずですよ。

朝起きて外に出たら、スズメがチュンチュンと鳴き、カラスが街中を物色している…。ヒトも家畜・ペットも野生動物も…。普通のことがいままで普通であり続けられる健康な地球であることを願っています。

# くちなしぬま 口無沼の野鳥

苫小牧市 鷺田善幸

## 口無沼について

口無沼は、樽前山地の中腹、標高200m付近に位置する。周囲は1.5km程で、ミズナラ、ハンノキ、トドマツなどの樹木に囲まれている。最も深いところで3m位。1年を通して干上がることはないが、大雨の後や雪解け時期には水位が上昇する。水源とみられる沢が北側にあり、この水が沼に流れ込んでいる。

イトトンボなどトンボが多く、エゾアカガエルもたくさん生息している。

苫小牧営林署が設置した沼を一周する遊歩道があるが、沼の北側は道が荒れていて一周するのは困難である。

名前の由来は、かつて「しりなし沼」と呼ばれていたが、「流れる口が無い」意が、いつのまにか「口無沼」に変化したようだ。

## 観察期間と観察区域

1989年10月から2011年11月まで、月に5回位観察した。11月下旬から翌年4月下旬は道道樽前錦岡線が冬期通行



口無沼位置図

止めとなる。そのため、12月から翌年3月は二カ月に1回位しか観察できなかった。

沼と、沼から西側300m程の範囲にある遊歩道沿いが観察コースである。鳥種の識別は8倍の双眼鏡による形態観察および種特有の鳴き声の聴取によって行った。



口無沼

## 観察結果から

約22年間で観察した野鳥は、表1にあげた4~11月の鳥に1月のオオワシを加えて30科94種である。なお観察回数が少ないため、1~3月と12月はリストから省略した。

## 一回だけ観察した野鳥

- コハクチョウ 2005年11月20日 2羽
- ヨシガモ 2001年4月28日 ♂3羽、♀2羽
- ハシビロガモ 2007年5月22日 ♂1羽
- オオワシ 1997年1月1日 成鳥1羽
- チュウビ 1990年10月10日 1羽飛翔
- バン 1994年5月28日 成鳥1羽
- オオバン 2007年11月17日 成鳥8羽
- キアシシギ 1996年6月1日 成鳥1羽
- ジュウイチ 1998年6月5日 鳴き声のみ
- ハリオアマツバメ 1994年8月28日 50羽以上飛翔
- クマガラ 2005年7月23日 鳴き声のみ
- オオアカゲラ 1993年5月5日 ♀1羽
- ムギマキ 1990年10月10日 1羽
- ミヤマホジロ 1990年10月10日 6羽

アカエリヒレアシシギは、1991年7月17日から22日に観察し、7月22日は8羽だった。

アカショウビンは1991年と1997年に鳴き声を聞いただけである。口無沼で繁殖はしていないと思われる。



過去の記録との比較

村井氏(引用文献1)によると、口無沼の野鳥は28科90種である。引用文献1に記録があるけれど、私が確認できなかった種は、ハジロカイツブリ、アカエリカイツブリ、トモエガモ、スズガモ、ツミ、キジ、クイナ、アオアシシギ、ヤマシギ、フクロウ、ヨタカ、ノゴマ、エゾセンニュウ、カシラダカ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、オオジュリン、アトリの18種である。

引用文献1で記録がなく、私が確認した種は、カワウ(たぶん)、コハクチョウ、オシドリ、カワアイサ、ミサゴ、オオワシ、チュウヒ、オオバン、キアシシギ、オオジシギ、アカエリヒレアシシギ、ジュウイチ、アカショウビン、クマガラ、ムギマキ、サメビタキ、コサメビタキ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ミヤマホオジロ、ニュウナイスズメの23種である。

表1 口無沼の野鳥リスト 1989.10 ~ 2011.11

科	種	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
カイツブリ	カイツブリ	○	○	○	○	○	○	○	○
ウ	カワウ?					○	○		
サギ	アオサギ		○	○	○	○	○	○	○
カモ	オオハクチョウ	○							○
	コハクチョウ								○
	オシドリ			○	○	○	○		
	マガモ	○	○	○	○	○	○	○	○
	カルガモ		○	○					
	ヨシガモ	○							
	コガモ	○	○				○	○	○
	ヒドリガモ	○	○					○	○
	アメリカヒドリ	○							
	ホシハジロ	○	○	○	○				○
	ホオジロガモ	○							○
	キンクロハジロ	○	○	○	○	○	○	○	○
	ハシビロガモ		○						
	ミコアイサ	○							
	カワアイサ	○							
タカ	ミサゴ		○				○	○	
	トビ	○	○	○	○	○	○	○	
	オジロワシ	○				○	○		○
	オオタカ					○	○		
	ハイタカ						○	○	
	ノスリ	○	○		○			○	○
	チュウヒ							○	
ライチョウ	エゾライチョウ				○				
クイナ	バン		○						
	オオバン								○
シギ	キアシシギ			○					
	イソシギ			○	○	○		○	
	オオジシギ		○	○					
ヒレアシシギ	アカエリヒレアシシギ				○				
ハト	キジバト	○	○	○	○	○	○	○	
	アオバト		○	○	○	○	○	○	
カッコウ	カッコウ			○	○				
	ツツドリ		○	○	○	○			
	ジュウイチ			○					
アマツバメ	アマツバメ					○			
	ハリオアマツバメ					○			
カワセミ	ヤマセミ	○			○	○	○	○	
	アカショウビン		○						
	カワセミ				○	○			
キツツキ	クマガラ				○				
	ヤマゲラ	○	○					○	
	アカゲラ	○	○	○	○	○	○	○	○
	オオアカゲラ		○						
	コゲラ	○	○	○	○	○	○	○	○

科	種	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
セキレイ	キセキレイ					○	○	○	○
	ハクセキレイ	○	○	○		○	○	○	
	セグロセキレイ						○	○	○
	ピンズイ		○	○	○				
ヒヨドリ	ヒヨドリ	○	○	○	○	○	○	○	○
モズ	モズ	○	○	○	○	○	○	○	
ミソサザイ	ミソサザイ						○		○
ツグミ	コルリ		○	○	○				
	ノビタキ						○		
	トラツグミ	○	○	○	○	○			
	クロツグミ		○	○	○	○	○		
	アカハラ		○	○	○	○		○	
	ツグミ						○	○	○
ウグイス	ヤブサメ		○	○	○				
	ウグイス	○	○	○	○	○	○	○	
	コヨシキリ			○					
	コメボソムシクイ		○	○					
	エゾムシクイ		○	○					
	センダイムシクイ		○	○	○	○			
	キクイタダキ	○				○	○	○	
ヒタキ	キビタキ		○	○	○				
	ムギマキ							○	
	オオルリ	○	○	○	○				
	サメビタキ		○	○		○			
	コサメビタキ					○	○	○	
エナガ	エナガ	○	○	○	○	○	○	○	○
シジュウカラ	ハシブトガラ	○	○	○	○	○	○	○	○
	ヒガラ	○	○	○	○	○	○	○	○
	ヤマガラ				○	○	○	○	
	シジュウカラ	○	○	○	○	○	○	○	○
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ	○	○	○	○	○	○	○	○
キバシリ	キバシリ		○						○
メジロ	メジロ					○		○	
ホオジロ	ホオジロ	○	○	○	○	○		○	
	ミヤマホオジロ							○	
	アオジ	○	○	○	○	○	○	○	○
アトリ	カララヒワ	○	○	○	○	○	○	○	○
	マヒワ					○			
	ベニマシコ	○	○	○	○	○		○	○
	ウソ	○							○
	イカル		○	○	○	○	○	○	
	シメ		○	○	○	○		○	
ハタオリドリ	ニュウナイスズメ		○	○					
カラス	カケス	○	○	○	○	○	○	○	○
	ハシボンガラス	○	○	○	○	○	○	○	○
	ハシブトガラス	○	○	○	○	○	○	○	○

### おわりに

2009年、2010年と口無沼のすぐ近くの口無林道がラリージャパンのコースとなった。多数のラリーカーが排気ガスをまき散らし、土ほこりをあげて口無林道を疾走した。環境にどのような影響を与えるのか不安である。

### 引用文献

- 1) 村井雅之. 1993. 口無沼の野鳥「郷土の研究」第6号. 苫小牧郷土文化研究会.
- 2) 苫小牧民報. 1994・8・4. 樽前山物語第二部 山の恵み水と緑8 口無沼. 苫小牧民報社.
- 3) 佐藤正秀. 1994. 私の探鳥地(27) 口無沼(クチナシマ). 北海道野鳥だより 第97号. 北海道野鳥愛護会.



アカハラ 2009. 5. 20

## 仙台での鳥見

仙台市 田中哲郎

北海道野鳥愛護会の皆様お久しぶりです。昨年6月まで苫小牧に住んでいて、探鳥会などでいろいろ御世話になった者です。

個人的な理由で実家のある仙台に引っ越しを余儀なくされましたが、新しい土地にも慣れマイペースでのパードウォッチングを続けています。



私です

宮城県内には、名前が全国区といえる伊豆沼・蒲生干潟をはじめとして鳥見に適したところが海・平野・山全域にわたり数々あります。仙台は宮城県のほぼ中央にあり県内であればほとんどの

場所が日帰りでも鳥見を楽しめます。やはり北海道に比べて「どこへゆくにも近い」という印象です。自然がいっぱいの「試される大地北海道」は広がったです。

昨年7月、引越しでの苫小牧から仙台までのフェリーでは航路最終の仙台湾に入ってから船がオオミズナギドリの方単位の大トリヤマに突っ込み一大スペクタクルを堪能しました。

こちらへ引越して来てすぐは、様子がわからず鳥見をするにあたって無駄な動きが多かった様に思います。久しぶりの土地は変化があまりに大きくとまどいました。浦島太郎です。

夏～秋のシギ・チドリの時期は海よりも田んぼがメインでした。稲穂が垂れる田んぼの中に散在する水が張られた休耕田にシギやチドリがたたずんでいる風景は北海道では見ておらず新鮮でした。

秋の猛禽の渡りは適当なポイントがわからず(というか適当な場所がないようでした)まったく見るできませんでした。9月～10月に室蘭の岬に通ったのが懐かしい思い出です。

冬は北海道では「通過」のみの鳥たちがこちらでは多く越冬してくれていて長い間楽しむことが出来ました。わが家から近い公園では数羽のオオマシコ、伊豆沼近くではマガンだけでなくカリガネの群(30羽ほど)に会えたりしました。カモ類の滞りも多いです。郊外の利府町にある加瀬沼には冬場カモたちが滞在していますが、昨年11月末にハシビロガモの群300羽ほどがいて数個の集団に分かれて水面をグルグルまわりながら採餌していました。話では聞いたことがありますが見たのは初めてでした。(写真参照)。もう一つ、12月末蒲生の干潟近くの池でオオタカがオオバンを襲い水没させた後岸まで引っ張っていました。2年ほど前にNHKテレビでオオタカがカラスを襲い水中に押さえ込む様子が放映されたのを見て衝撃を受けた覚えがありますが(埼玉県山口貯水池?)これと類似の行動を見ることが出来ました。

3月11日の東日本大震災の地震の揺れは暴力的と言いたくなるほど激しいものでした。この日は東松島市野蒜に水鳥等を観察に行っていました。近くの鳴瀬川河口を出たのが地震発生20分前でした(地震発生後では洪滞になり逃げ切れたか?)。自宅への帰路はいつもなら海岸沿の道を選ぶのですがこの時はなぜか山側のルートを通り幸いに津波の被害にも会わずに済みました。運が良かったというほかありません。震災の後に津波に会った人の話をいくつか直接聞きましたが、皆「助かったのはまったく運がよかったです」と言っていました。被災して九死に一生を得た人そ

れぞれにドラマがあります。あまりにお気の毒な話もありました。亡くなられた方のご冥福をお祈りいたします。また被災された方々の生活が元に戻り心身ともに元気を取り戻され、街の復興がなされるよう心からお祈りいたします。

震災の後しばらくは生活を維持するのが精一杯で鳥見はお預けでした。その後日々の生活も落ち着いてまた鳥見を再開しています。5月の連休直後には山形県の飛鳥を訪ね、多くの珍しい鳥に会えました。今年は当たり年だったとのことでした。

震災のあとの整理は少しずつ着実に進み大きなガレキは大分片付けられました。しかし細かいところはまだまだです。鳥達は休憩する場所がなくなって困っているのではないかと気になります。それでも県南部の被災地の海岸では



ハシビロガモの群れ 1

ガレキの中でたくましくコアジサシが営巣し無事繁殖していました。砂浜は堤防工事のため進入禁止となりバギー車が入れなくなって環境はよくなったのかもしれませんが。

仙台に来てから初めて確認できた当地ならではの鳥としては以下があげられます。サンコウチョウ・オナガ・アオゲラ・ノジコ・ゴイサギ・ササゴイ・コアジサシ・ヨシゴイ・セッカ。

こちらでも鳥見が好きな方々と知り合いになり、意見を交換したり貴重な情報をいただいたりしています。今後もマイペースで鳥見を楽しんで行きたいと思います。

あらためて、北海道野鳥愛護会の皆様御世話になりました。有り難うございました。これからも会のますますの御発展をお祈り申し上げます。



ハシビロガモの群れ 2 (左写真の右下部分を拡大)

## 美唄市和田公園の鳥その後

美唄市 藤 卷 裕 蔵

和田公園は、JR美唄駅の東約1kmほどにある面積約2haの公園である。わが家がこの公園に隣接しているので、家にいるときには飛来する鳥を観察できる。2002年4月～2004年4月の2年間で、この公園で48種の鳥類を記録した(本誌137号)。

その後、新たに記録した鳥について簡単に紹介したい。

アオサギ：当初上空通過だけであったが、2005年4月上旬以降は池にも飛来するようになり、岸辺で池の魚を狙うようになった。

マガモ：2005年以降春先に数羽が飛来するようになった。

ハシビロガモ：2005年4月22日に雌雄各1羽が、初めて池に飛来した。

コガモ：2005年5月2日に2羽が飛来した。

ミサゴ：2011年4月21日、餌をもった1羽がカラスに追われ、上空を旋回していた。

ハイタカ：2010年2月6日、雌1羽がイチイの繁みに隠

れたスズメをしばらくの間狙っていた。

キジ(コウライキジ)：2011年5月5日、雄1羽が歩いて公園を横切った。周囲は住宅地なのに、どこから来たのか不思議である。

マミジロキビタキ：2009年6月1日早朝に数分間囀が聞かれた(詳しくは本誌157号参照)。

メボソムシクイ：毎年5月下旬～6月上旬に囀が聞かれるが、2011年には6月末まで囀が聞かれた。

以上、2004年4月までの48種に新たに観察できた8種を加えると、56種となる。

公園には池があるが、飛来するカモ類は意外と少ない。カルガモとマガモがときどき見られる以外は、上記の種がまれに飛来するだけである。また、小鳥類もそれほど多くない。多分、大きな木があるものの、立木密度が低く、林床が芝生状となっているためであろう。

## 観察環境について感じたこと

江別市大麻 蓮井 肇

現在、私は東京都大田区に住んでいます。いわゆる単身赴任です。仕事の関係で今年(2011年)4月よりこちらに移ってきましたが、北海道に住んでいた時と同じように毎週、鳥達を見に出かけています。私の住んでいる大田区は近くに東京港野鳥公園や多摩川があり、少し足を伸ばすと明治神宮の森、行徳野鳥観察舎、葛西臨海公園、谷津干潟、等々の皆さんご存知の探鳥地がそろっており(車で30分程度)環境的には恵まれた場所に越してきたと感じていました。もちろん北海道とは違い他県とも高速道路網でつながっているのも道内で週末に遠出探鳥するつもりであれば長野県や新潟県等も射程圏内(300km程度)に入りますのでそちらを外す訳にもいきません。せっかく何かの縁(仕事です)でこちらに来たのですから知っている探鳥地をどんどん回ってこちらでしか見られない鳥を見て楽しんでやろうと意気込んでスタートし半年が経ちましたので行った探鳥地や出会った鳥達、そこでの感想をレポートしたいと思います。

まずは近場の東京港野鳥公園をインターネットで調べて鳥見を開始しました。東京港野鳥公園は臨海地域にある大田市場やJR貨物ターミナルに隣接している為に平日の周辺道路は大型トレーラーだらけです。又、羽田空港にも近いために離着陸の航空機が頻繁に近くを通過するのでジェット音が結構気になります。ウトナイ湖の数倍状態です。

私が行ったのは日曜日ですので広い道はガラガラ状態で走りやすく予定時間より早めに駐車場へ到着しました。ここは出入が管理された公園ですので9時から17時と時間が決められているほか維持管理の為の入場料がかかりますので受付で券を購入して入場します。場内は管理が行き届いており遊歩道も歩きやすく小さな子供連れの家族でも安

心して楽しめる環境です。鳥を見るにはネイチャーセンターや観察小屋といった決められた場所からの観察が主となりますが、観察施設が整っている分チャンスに恵まれるとすぐ近くで野鳥観察ができるという利点があります。この日(4月10日)は、ツグミ、アカハラ、シロハラといったツグミ類やアリスイも観察できましたし綺麗なカワセミも観察することもできました。都内の物流拠点のすぐ近くにこのような環境があるのには驚かされました。



セイタカシギ 2011. 4. 24 葛西臨海公園

次に行ったのは江戸川区の葛西臨海公園です。ここは臨海地域に作られた大型行楽地といった感じの場所で、園内には遠方からでも良く見える観覧車をはじめ水族園、人工なぎさ、芝生広場等があり園内をパークトレインが走っているといったところです。私も何度か行きましたがとにかく休日には人の多い場所ですので、所によってはスコープを立てて観察していると違和感を覚えることもありました。ここでは主に鳥類園や人工なぎさで野鳥観察をすることになりますが鳥類園自体は東京港野鳥公園と同じようにウォッチングセンターや観察小屋といった決められた場所からの観察となります。又、人工なぎさはシギチドリ類やカモ類、サギ類、カモメ類や鶺鴒も居ますが時期時間によっては水遊びの人達でそれどころではなくなるので注意が必要です。私はここでミヤコドリやコアジサシの観察ができましたし鳥類園ではセイタカシギやオオハシシギといったシギチドリ類をはじめアカガシラサギといった珍鳥も近くで観察できました。私個人としては比較的近場でアクセスが良く多くの種類を1日で観察できている場所ですので行く回数も自然と多くなっている観察地の1つです。

次に向かったのは千葉県の谷津干潟です。ここは干潟といてもプール状に壁で囲まれた大きな場所(外周約3km)



ミヤコドリ 2011. 4. 24 葛西臨海公園

に海からの水路がつながっていて干満が発生しているといった場所です。すぐ近くまで住宅や学校がせまっておりスコープや双眼鏡の中に必ずそれらが入ってしまう環境で違和感を覚えました。自然観察センターや外周路、観察施設等も充実していてシギ・チドリ類の飛来数も多く、数多くの観察者やカメラマンが訪れる場所でした。私が訪れた日（5月8日）にはシギ・チドリ類を11種確認できましたし、チュウシャクシギやオオソリハシギの数の多さに圧倒されてしまいました。

関東圏にはまだまだ多くの探鳥地がありますが、最後に遠出の話もしておきたいと思います。冒頭でも書きましたが高速道路網を生かして訪れることができる日帰り探鳥には何回かは行ってみたいと思っていました。その中でも特に長野県や新潟県には是非行ってアカショウビンに出会ってみたいと思っていました。5月末から6月にかけて4回出かけましたが、結局留まっている姿を1度、轉りを少し聞くことが出来た程度でしたが時間をかけて行き来して見ることができた真っ赤な鳥はすごく思い出深いものになりました。又、それと同時に私がアカショウビンを見た環境が実に野幌森林公園に似ているということにも驚かされま



アカショウビン 2011. 6. 12 長野県戸隠森林植物園  
私たちが普段なにげなく定例探鳥会でお世話になっている場所はすばらしい環境なのだということを改めて感じた遠征にもなりました。

以上で報告を終わりますが、関東地方にはまだまだたくさん探鳥地が存在しています。時間の許す限り色々な探鳥地を回って数多くの鳥たちと出会って思い出多い単身赴任生活にしたいと思っています。

## 蒲澤鉄太郎さんを悼む

北海道野鳥愛護会会長 小堀 煌 治

「ワッハッハ、豪快な笑い声、太い眉毛にドングリまなこ「俺は本当は酒なんか嫌いなんだ、明日鳥がいっぱい見られるように仕方なく飲んでるんだ」、ギャグを連発しながら周囲を楽しませた蒲澤さん。もうその勇姿を見ることはできなくなりました。「8月23日に病院で静かに息を引き取りました。78歳でした」奥様からの突然の訃報に本当に驚いてしまいました。

蒲澤さんは数年前から病魔と闘ってきましたが、昨年は病状も落ち着き小康状態を保っているように見えました。しかし今年の4月に転倒し骨折してしまいました。骨折の治療を優先するため、続けてきた薬や治療を中断したそうです。それでも亡くなる3日前までは元気そのもの、食べたい物を奥様に所望し、食欲も旺盛、車イスを自由に操作して病院の中を動き回っていたそうです。病状が急に悪化したのか、亡くなる2日前から床に伏しそのまま眠るように息を引き取られました。

蒲澤さんは若い時から登山など自然に興味を持っていましたが、野鳥には関心がなく、旭川に住んでいた頃には探鳥会に参加する奥様を車で送迎し、自分は外に出ず、車の中で終わるのを待っていたそうです。何時ものように車で待機中、近くにキビタキが現れ、奥様に誘われるままスコープをのぞき、鮮やかな黄色と

黒、特に“黒いひとみ”にすっかり魅せられてしまったようです。その後は進んで探鳥会に参加、皆勤賞を貰うまでに、のめり込んでしまいました。

愛護会に入会したのは割合遅く60歳を過ぎてからです。探鳥会に熱心に参加され、気さくな人柄から皆さんに親しまれ、この人ならと見込まれて幹事に推薦されました。持ち前の企画力、行動力を発揮してリーダーとなり「一泊探鳥会」を実現させました。入念な下見と周到な準備、期待を裏切ることなく、いつも堪能させてもらいました。旅行社がうらやましがらる程の人気探鳥旅行でしたが、8回目あたりから少し疲れが出てきたようですが「10回までは自分がやる」と頑張ってくれました。

70歳を過ぎても海外探鳥旅行にも盛んに参加し、うらやましい程元気でした。酒を飲んだ時など、「元気で旅行ができるのも75歳まで、金など残さず、行きたい所に行くんだ」と、もらす事がありました。まさかと思っていましたが、75歳を過ぎた頃から精悍な顔にも陰りが見え始めたような気がします。今年の総会ではいつもと変わらず会計監査をしていただき、来年度も元気な顔をみせてくれるものと信じていたのですが残念です。戒名にも‘然’の一字が付くほど自然を愛した蒲澤さん。今は只ご冥福を祈るばかりです。



### 野幌森林公園

2011. 7. 10

【記録された鳥】キジバト、アオバト、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、ハシブトガラ、ヤマガラ、アオジ、カワラヒワ、ハシブトガラス

以上17種

【参加者】秋山洋子、井上詳子、岩井 茂、内山英晋、大表順子、後藤義民、坂井伍一、高橋きよ子、高橋利道、中正憲信、成澤里美、畑 正輔、早坂泰夫、松原寛直・敏子、村木敬太郎、横山加奈子

以上17名

【担当幹事】成澤里美、畑 正輔

### 石狩川河口

2011. 8. 21

札幌市手稲区 矢木沢 徳弘

野鳥に興味を持ったのは、昨年6月に銭函天狗岳麓の溪流付近で野草観察をしていた時です。秋でもないのに虫の音？と思ったらヤブサメという鳥、また、頭上でとても大きな声で元気良くさえずるのがミノサザイというとても小さな鳥だと教えられました。その時は姿が見えなかったその鳥たちを是非見たい、もっともっと色々な鳥を知りたいと思うようになりました。

探鳥会には今年の5月末から参加し始めました。北海道野鳥愛護会そして海辺の探鳥会は初めてです。当日は天気が良い気温も高かったのですが、汗もかかないほど浜風が心地よく、探鳥会日和でした。

集合場所に行くと、空高くトビが飛んでおり、私は識別できませんでしたが、近くの草原にカワラヒワやノビタキが飛んでいるのを皆さんが既に観察していました。参加者は50名近くで驚きました。幹事の方2名と腕章をつけた会員の方が数人いたのは心強いです。

いよいよ海岸へ。すぐに双眼鏡で波打ち際に2羽の遊んでいるトウネンを発見。初めて聞く名です。スズメ大で、その特徴を幹事の方がすぐ図鑑で教えてくれました。海岸近くにウミネコが3~4羽浮いており、その近くの黒っぽい鳥は何かと尋ねるとウミネコの幼鳥との答。するとその大きな幼鳥が母親？に首を振り振り、甘えた声でエサをねだるのですが、どうやらもういい加減に自分でエサを捕りなさいと母親が怒って追い払ったようです。この光景に思わず微笑んでしまいました。

途中、ウミウはのどかに飛び、ショウドウツバメは忙しそうにしており、そろそろ南方に渡っていく頃でしょうか。このショウドウツバメは7月にビーチコーミング（浜辺に落ちている漂着物を拾い集める遊び）をしていた時、新川河口付近の土手に沢山営業・飛翔しているのを初めて見て

感動したばかりです。

石狩川河口にはアジサシの群れが青い海・白い雲に映え優雅に舞っており、実に癒されました。まわりの人の話によればトンボを空中で捕食しているらしい。アジをダイビングキャッチするからアジサシの名になった？

そろそろ解散という時、石狩川の対岸になんとミサゴを望遠鏡で見事にキャッチした方がいました。参加者全員が「よくやった！今日一番の収穫だ。」と大喝采！本当にすごい！双眼鏡では無理なので、私はベテランの方々の3台もの望遠鏡で見させていただきました。ミサゴは「さわやか自然百景」で見たような、聞いたような気がしますが、実際に見るのはもちろん初めてです。

当日はトウネン、アジサシ、ミサゴに初めて会えたことが一番ですが、まだまだ初心者なので、すべてが新鮮で楽しくてたまりません。幹事さん、参加者のみなさん、本当にありがとうございました。またお世話になります。

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、ミサゴ、トビ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、アジサシ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、エゾセンニュウ、ホオアカ、カワラヒワ、ハシボソガラス、ドバト

以上17種

【参加者】秋山洋子、板田孝弘、井上詳子、今村三枝子、岩崎孝博、上村淳子・俊太・優貴乃、内山純一、梅木賢俊、大島 武、大表順子、川東保憲・知子、栗林宏三、クロズ千鶴子、後藤義民、坂井伍一、沢田浩一、品川陸生、高田征男、高橋きよ子、高橋良直、竹田芳範、田辺 至、辻 雅司・方子、戸津高保・以知子、長尾由美子、中正憲信・弘子、西尾京子、野田貴代子、蓮井 肇、畑 正輔、濱野由美子、樋口孝城・陽子、本間康裕、松原寛直・敏子、丸島道子、宮本 護、村田睦子、矢木沢徳弘、山本昌子、吉川茂子、吉田慶子

以上49名

【担当幹事】坂井伍一、中正憲信

### 鵠川河口

2011. 8. 28

札幌市中央区 本間 康裕

シギ・チドリで有名な鵠川河口の秋の探鳥会。しかも、地元「ネイチャー研究会inむかわ」の門村徳男氏の解説付きとあって、期待は高まった。さらに天気は快晴。しかし、結果は…。いや、探鳥会は珍鳥を見るだけが目的ではない。オグロシギをじっくり見られたし、猛禽も出現したし。変化してゆく鵠川河口の実態に触れることができた有意義な一日だった。

集合場所「四季の館」から歩いて、牛舎に近づくと早速、スズメの出迎えを受ける。土管を並べた土橋に出ると、遠くにアオサギ、カルガモ。カイツブリはこちらの視線を感じるのか双眼鏡を合わせる度に潜水する。茂みの上にはノビタキ。

おなじみの顔ぶれだが、確か去年は、雨でこの土橋が流されていたはず。自然の力の大きさと、それがもたらす攪乱。それにもかかわらず同じ鳥たちがそろうという不思議（い

や当然か)に思いをはせる。

人工干潟まで足を伸ばすと、草の間に2羽のオグロシギの姿。しきりに水中に嘴を入れている。真っすぐの嘴の基部は肉色。足は黒。胸はわずかに赤褐色がかかる。なんとか頭にたたき込んだ。もう忘れないぞ。

識別に苦労せずに、特徴をしっかり覚えられるのが探鳥会参加の利点だ。一人で見ていれば、まずオグロシギと見分けるのに一苦労するはず。ありがたい。

さらに、遠方に立つ木柱の上にオジロワシがとまる。越夏個体とのこと。こうした情報がわかるのもうれしい。

帰りがけにはハヤブサも出現。華麗な飛翔を見せるが、狩りには失敗。観客のわれわれを沸かせる。

探鳥会では鳥以外のことを勉強できるのが楽しみだ。植物、昆虫、魚類、そしてその土地の人の考えを知ることができる。私たちが鳥を通して見なければならぬのは、環境とその変化、そして人の営みとの関わり。それを教えてくれるのは探鳥会に集う仲間たち。

鶴川河口も町名が「鶴川町」から「むかわ町」に変わっただけでなく、さまざまな変化があるようだ。シギ・チドリ渡来の最盛期に比べると、乾燥化は進んでいるのか。こうした疑問に答えるためにも、今後も探鳥会に参加したい。

【記録された鳥】カイツブリ、ウミウ、アオサギ、トビ、オジロワシ、ハヤブサ、マガモ、カルガモ、ホシハジロ、オグロシギ、アオアシシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、コヨシキリ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上24種

【参加者】阿部真美、石神直登・美代子、岩井 茂、岩崎孝博、後木健一、内山純一・雅子、及川 澄、小山内恵子、加藤茜湖、門村徳男、川東保憲・知子、栗林宏三、小堀煌治、坂井伍一・俊子、品川睦生、島田芳郎・陽子、高津戸昭子、田中 陽・雅子、辻 雅司・方子、戸津高保、内木克巳、中正憲信・弘子、中田勝義、永田一徳、橋倉慎吾、畑 正輔、浜野チエ子、原 美保、樋口孝城、本間康裕、松原寛直・敏子、山口ちひろ、山本和昭、鷺田善幸

以上43名

【担当幹事】門村徳男、樋口孝城

## 石狩川河口

2011. 9. 18

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、ミサゴ、トビ、メダイチドリ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、ヒバリ、ハクセキレイ、ノビタキ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ 以上14種

【参加者】秋山洋子、今村三枝子、岩井 茂、岩崎孝博、白田 正、内山英晋、及川 澄、栗林宏三、坂井伍一、島崎康広、島田芳郎・陽子、竹田芳範、中正憲信、中田勝義、蓮井 肇、浜野チエ子、林 美穂子、原 美保、樋口孝城、本間康裕、山本和昭、横山加奈子、吉川茂子、吉田慶子

以上25名

【担当幹事】中正憲信、横山加奈子

## 宮 島 沼

2011. 10. 2

当別町 道川 富美子

空知地方に雷、強風、大雨注意報が出されていて、担当幹事さんには探鳥会中止も念頭にあったようですが、次々に“鳥好きさん”達が集まり、定刻通りに始まりました。すでに風に雨が舞うなか、観察小屋に入り、強者は小屋の外でスタート。

真っ先にカルガモが沼広く陣取っているのが目に入り、そのなかにキンクロハジロ、コガモ、スズガモ、オナガガモなどが大小の群れで混じっています。対岸のヨシの影にはアオサギやツルシギが休んでいました。順々にトモエガモ、ハシビロガモやハジロカイツブリなどを見つけ、歓声が上がります。数が少ないのや見つけづらいのも皆で充分楽しめ、探鳥会ならではのお得感。ハヤブサ、チュウヒ、オオタカ、オジロワシの順に猛禽類が現れ、なかでもオオタカはカモを狙って何度も身を翻し、目の前を美しい姿を自慢するかのようになっていきました。

雁は3万羽くらい集結しているということでしたが、探鳥会の間はマガンとヒシクイが少数行き来しているだけだったのが少し残念でした。電(ヒョウ)まで降りましたが、雲の隙間から射す光を浴びて揺れるカモ達、大粒の急な雨に驚いたのかいっせいに飛び立つ群れ、青空を映す沼、霧雨に霞む沼、なかなかの探鳥会でした。

【記録された鳥】ハジロカイツブリ、カワウ、アオサギ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、オオタカ、ハヤブサ、オオハクチョウ、ヒシクイ、マガン、マガモ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、スズガモ、トモエガモ、ツルシギ、キジバト、ヒバリ、モズ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上30種

【参加者】秋山洋子、阿部真美、北山政人、栗林宏三、佐藤ひろみ、品川睦生、鈴木立士、高橋良直、田中 陽・雅子、中正憲信・弘子、浜野チエ子、原 美保、樋口孝城、道川富美子、横山加奈子、吉田慶子 以上18名

【担当幹事】北山政人、栗林宏三

## 野幌森林公園

2011. 10. 9

札幌市中央区 青山 和正

初参加の私に何か感想でもと依頼されてとりあえずペンをとりました。今日は良天にめぐまれ小春日和とはこのような温和で暖かい天気のことなのかなと感じながら心地よい一日を送ることができました。

頭上を横切った野鳥を瞬時にあれはオオタカです、また鳴き声を聞きあれはカケスですと教えていただき動物視力や聞き分ける耳の良さには驚かされました。

私もしばらく忘れていた少年時代の心のトキメキや高揚感を久しぶりに呼び戻し自分にもまだそういった胸の高ま

りが失せていなかったことに感激しました。

今年63才になる私ですが日常の雑多な仕事に追われ自然に接する機会から遠ざかっていました。探鳥会に参加することで野鳥の観察や森の移り変わりを体験し、より感性を豊かにする切っ掛けになればと思っています。そして皆様のお顔を拝見し、一人一人が穏やかでとてもよい顔をされている様子を見て仲間に入れていただければと願っています。これからもいろいろ教えていただき、より多くの野鳥の種類を識別できるように参加して勉強していきたいと思えます。御指導のほど宜しくお願いします。今日は本当に楽しかったです。ありがとうございました。

【記録された鳥】 カイツブリ、トビ、オオタカ、ノスリ、コガモ、マガモ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、ヒヨ



【小樽港】2012年1月15日(日)

札幌からの貸切バスを利用して行きます。探鳥コースは日和山灯台付近、祝津漁港、高島漁港、フェリーターミナルなどです。以下の要領で行いますので、参加希望者は申込み下さい。

集合場所 札幌駅北口(中央)「鐘の広場」

集合時刻 午前8時

帰着時刻 午後4時頃

定員 45名

参加費 1,500円

申込先 畑 幹事 (Tel 011-894-0017)

1月4日(水)から6日(金)まで電話で受け付けます。受付時間は午前9時から正午までです。定員になり次第締め切ります。

その他

- ・小樽駅で小休止してから探鳥コースに入ります。
- ・フェリーターミナルで昼食を取ります。
- ・往復とも途中乗車・下車はできません。

【野幌森林公園】2012年2月5日(日)

集合 午前9時 野幌森林公園大沢口

交通 新札幌駅ターミナル発

夕鉄バス(文京通西行)大沢公園入口下車

JRバス(文京台循環線)文京台南町下車

【円山公園】2012年3月4日(日)

集合 午前9時 円山公園管理事務所前

交通 地下鉄東西線 円山公園下車 徒歩8分

【ウトナイ湖】2012年3月18日(日)

集合 午前9時30分 野生鳥獣保護センター駐車場

交通 千歳空港発のバスがあります。

ドリ、ウグイス、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、カケス、ハシブトガラス 以上23種

【参加者】 青山和正、阿部真美、伊藤信治、井上公雄、井上詳子、今村三枝子、大坂博記、大島 武、後藤義民、坂井伍一、沢田浩一、品川睦生、清水朋子、高田征男、瀧徳三、田中 陽・雅子、田仲利恵子、戸津高保、富川 徹、内木克巳・靖子、中正憲信、畑 正輔、広木朋子、辺見敦子、松原寛直・敏子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子

以上31名

【担当幹事】 後藤義民、富川 徹

☆9月4日の野幌森林公園は雨天中止となりました。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具などをお持ち下さい。

☆何れの探鳥会も悪天候でない限り行います。

☆問い合わせ 北海道自然保護協会 011-251-5465

午前10時～午後4時(土・日祭日を除く)

## 鳥民だより

◆新年講演会のご案内◆

・日 時 2012年1月7日(土) 13:30～16:30

・場 所 札幌エルプラザ内

札幌市男女共同参画センター 4階大研修室

北区北8条西3丁目(札幌駅北口より徒歩3分)

・講 師 早矢仕 有子 氏(札幌大学法学部)

・演 題 シマフクロウとの付き合い方

・講演内容:シマフクロウへの国の保護事業が始まってから27年が経ちました。その間に、この鳥に対する行政府の対応は目覚ましく好転しました。とりわけ国有林における森林管理の方法は180度転換を遂げたと言えるでしょう。しかし、今もなおシマフクロウの未来は安泰ではありません。現在、彼らの生活を脅かしているのは大規模開発でも行政の怠慢でもなく、市民の不法と欲望です。私たちがシマフクロウの「良き隣人」になれる方法を一緒に考えていただけませんか?

・野鳥写真映写(15:20ぐらいから)

皆さんの持ち寄った野鳥写真を映写します。問い合わせは高橋幹事まで(BRB32264@nifty.com)。

・参加費 500円

・懇親会 新年講演会終了後、煉瓦亭(北1西3、敷島北一条ビル地下一階)で行います。会費は3,500円程度です。前もっての申し込みは不要です。どうぞご参加下さい。

【新しく会員になられた方】

高橋 宣子 (札幌市南区)

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>